

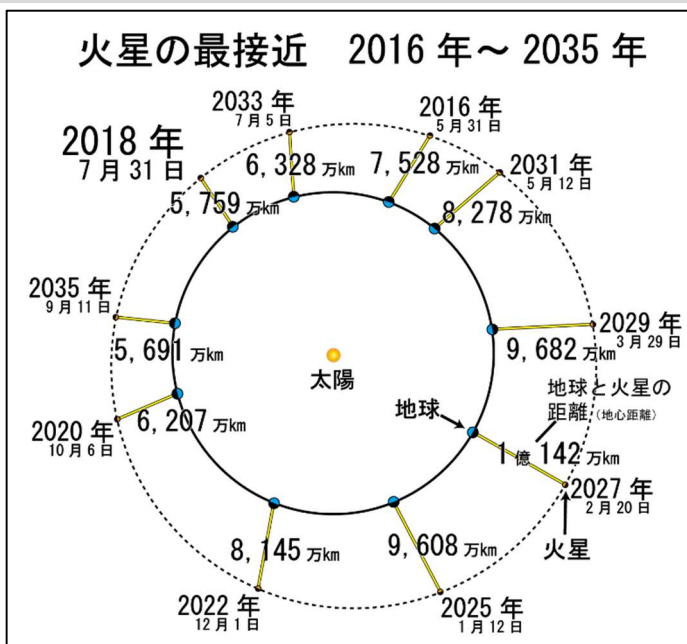
# 2018年～火星の大接近～

## ◆火星の最接近とは

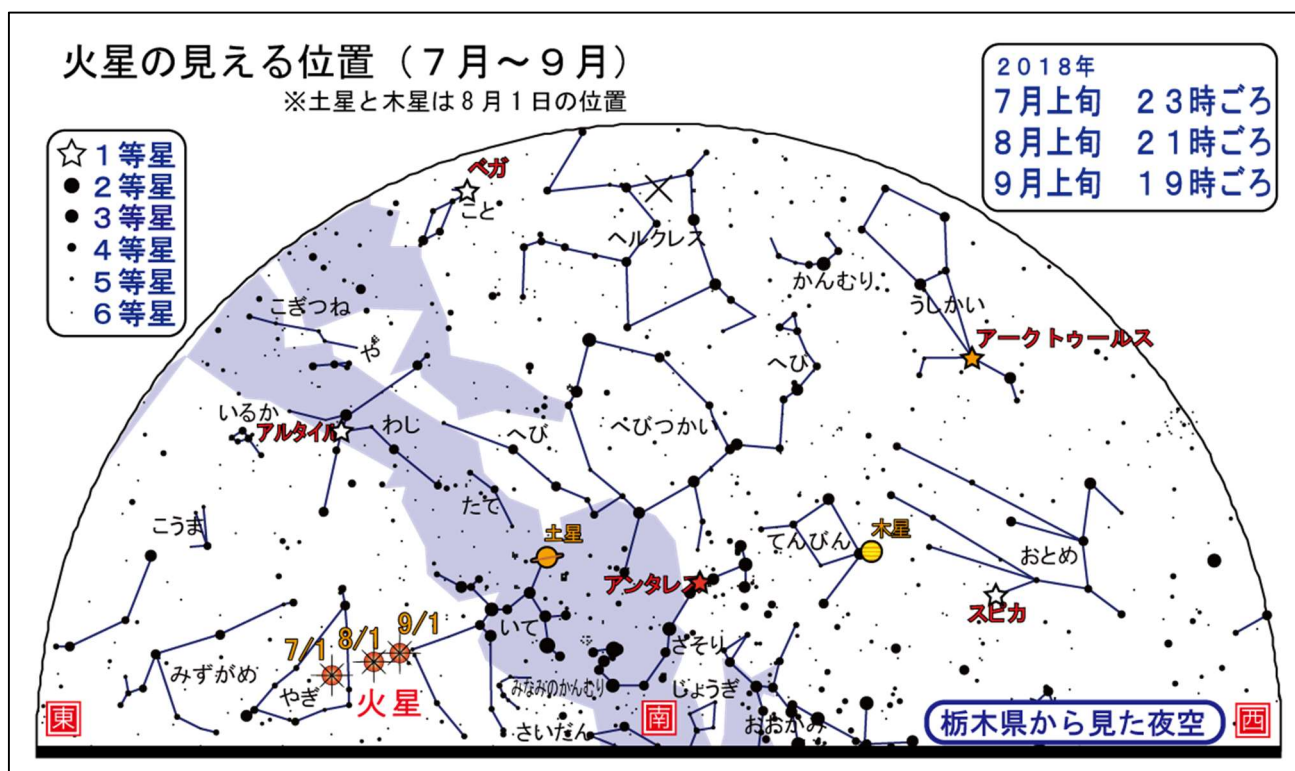
地球は約365日、火星は約687日で太陽のまわりを1周しています。そのため、約2年2か月で地球は火星に追いつき、追い越します。そのとき、地球と火星の距離が最も近づくことを「火星の最接近」といいます。

2年2か月ごとに火星を地球が追い越すため、最接近をする位置は毎回異なります。そして、地球の公転軌道は円に近いことに対して、火星の公転軌道は少し楕円の形をしているため、最接近をする位置によって、地球と火星の距離が異なります。

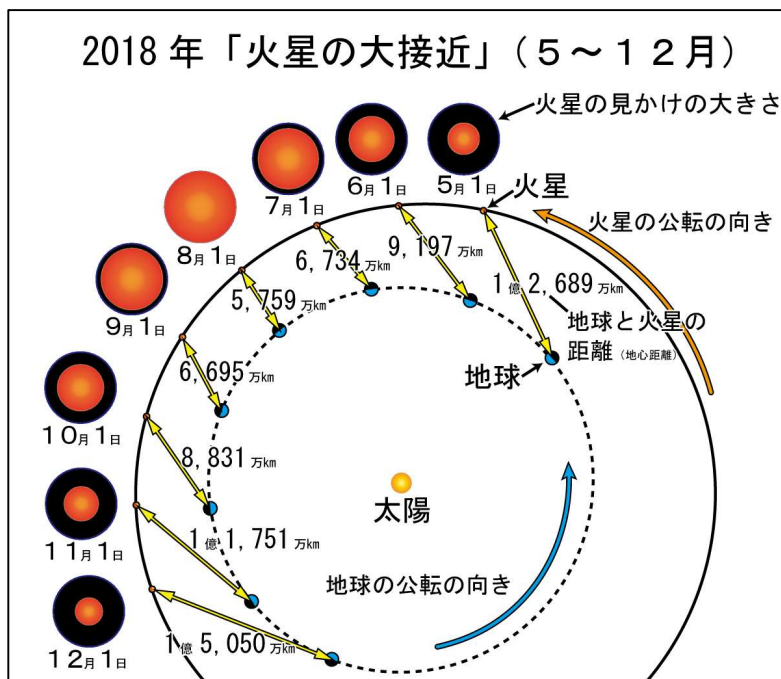
特に明確な定義はありませんが、地球と火星の距離が比較的遠い場合の最接近を「小接近」、比較的近い場合の最接近を「大接近」と呼んでいます。火星との距離が近い「大接近」の頃には、いつもよりも明るく、大きな火星を見ることができます。



## ◆火星はいつ、どこに見える



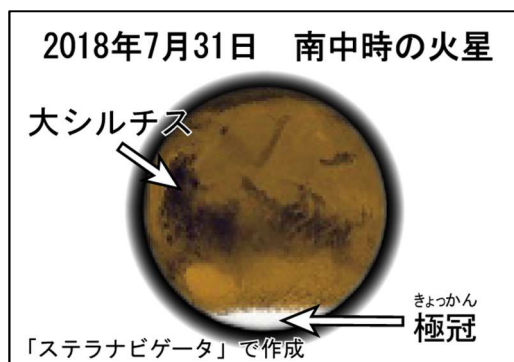
最接近した頃の火星は、19時頃に東の空に昇り、真夜中頃に真南の空に見えます。地球と火星が最も近づく7月31日には、火星の明るさはマイナス2.8等級と、まわりの星に比べて、ひととき明るく輝きます。右の図のように、地球と火星は徐々に近づき、徐々に離れていくため、最接近の日だけでなく、この夏の間中、いつもより明るく輝く火星を見ることができます。9月上旬頃までは、明るさがマイナス2等級を超えます。また、9月以降10月くらいまでは、火星の昇る時刻がだんだん早くなり、宵の頃、南の空高いところで、赤く輝く火星を楽しむことができます。



### ◆火星の模様

肉眼でも赤く光り輝く火星を楽しめますが、望遠鏡で見ると火星の模様を観察することができます。火星の模様をよく見ると、白い帽子のような部分が見えます。これは、「極冠（きょっかん）」といい、火星の南極や北極の部分にできます。水や二酸化炭素の氷（ドライアイス）でできています。黒っぽい、大きな黒い模様は「大シルチス」と呼ばれる地形です。

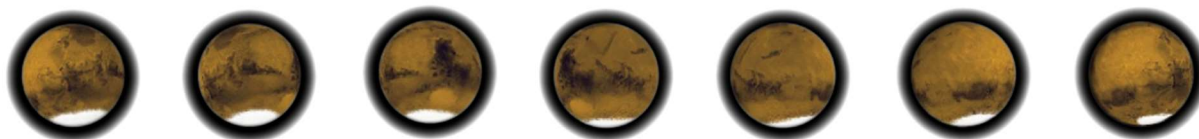
そして、地上から見える火星の模様は、いつも同じではありません。地球自身が一回転するのにかかる時間は約24時間であるのに対して、火星は約24時間40分と少し長く、この40分の差によって、地球から同じ時間に見る火星の模様は変わっていきます。



### 火星の自転による模様の変化

地球の自転周期→約24時間

火星の自転周期→約24時間40分



7月16日 7月21日 7月26日 7月31日 8月5日 8月10日 8月15日

「ステラナビゲーター」で作成